

## 明治大学図書館所蔵、エジプト学貴重書展

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学図書館 公開日: 2018-07-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 憲一, 馬場, 匡浩, 根岸, 愛 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/19465">http://hdl.handle.net/10291/19465</a>

# 明治大学図書館所蔵、エジプト学貴重書展

佐々木憲一\*・馬場匡浩<sup>†</sup>・根岸 愛<sup>§</sup>

## はじめに

明治大学図書館は、19世紀エジプト学黎明期に刊行された稀覯本・貴重書を数多く蔵書しており、これまで『図書の譜』第9号(2005)、第10号(2006)、第15号(2011)で、高宮いづみ(近畿大学教授、執筆当時文学部兼任講師)、佐々木憲一、馬場匡浩が紹介してきた。また2006年2、3月には、明治大学博物館特別展示室の半室をお借りして、代表的な資料を展示した。

前回の展示から10年以上経ち、その間にエジプト学貴重書コレクションも若干増えたことから、2017年6月3日から27日にかけて大学博物館特別展示室全室をお借りして、標記の企画展を開催した。この企画展は佐々木が中心となって、エジプト学者の馬場匡浩の監修を仰ぎ、根岸愛の協力を受けて進めたものである。24日間の会期中に2590名もの人が見学に訪れ、6月14日には馬場が展示解説を行い、これまた多数の皆さんに来ていただいた。16日には学長にも見学に来ていただき、佐々木が解説した。

今回の企画展にあたっては、明治大学図書館長の山泉進先生、明治大学博

---

\*ささき・けんいち／明治大学文学部教授

<sup>†</sup>ばば・まさひろ／早稲田大学高等研究所准教授・明治大学文学部兼任講師

<sup>§</sup>ねぎし・めぐみ／明治大学文学部考古学専攻

■古代エジプト地図

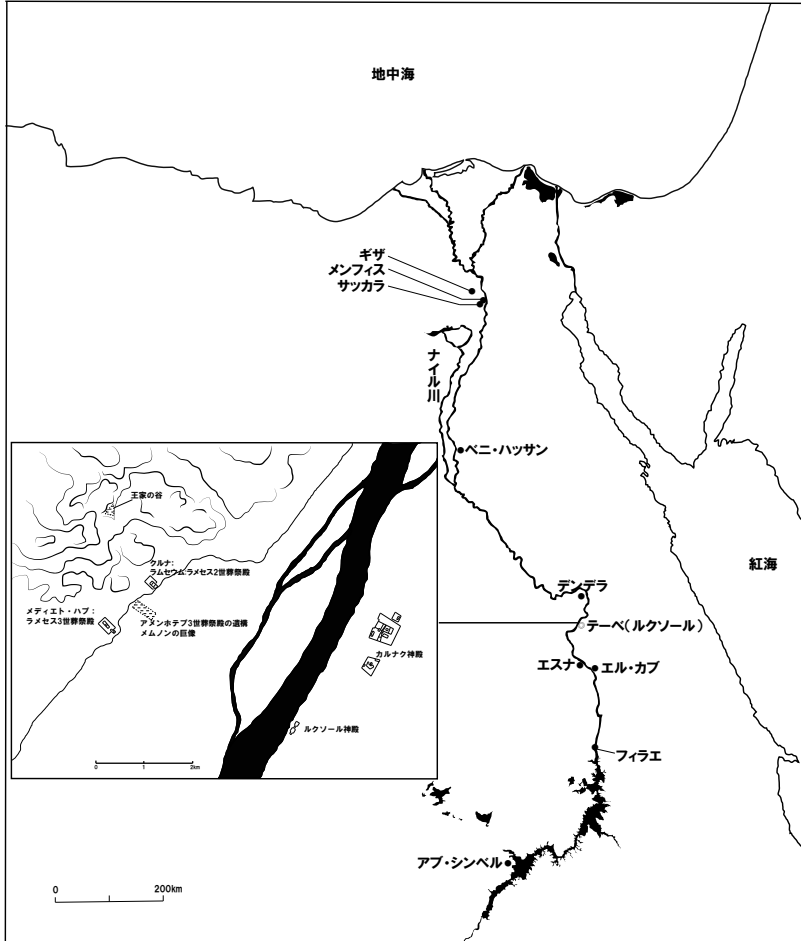


図1 エジプト地図

博物館長の村上一博先生の格別のご高配を賜り、また博物館学芸員の忽那敬三氏には準備の段階から大変ご苦勞いただいた。心から御礼申し上げたい。

今回展示したのは、ナポレオン1世のエジプト侵攻(1798-9)に参加したフランス人研究者たちによる『エジプト誌：フランス軍の遠征中にエジプトで行った観察と研究の集成 *Description de l'Égypte, ou Recueil des Observations et des Recherches qui ont été faites en Égypte pendant l'expédition de l'Armée Française*』初版(1809~22)の内、古代篇図版5冊とエレファント判図版3冊、ヒエログリフ解読に成功したジャン＝フランソワ＝シャンポリオン Jean Francois Champollion 自身によるエジプト遠征の報告書『エジプトとヌビアの記念物 *Monuments de l'Égypte et de la Nubie*』全4冊(1835~47)、シャンポリオンがヒエログリフ解読の成果をフランス学士院で2回目に報告したときの配布資料『デュルプス氏への書簡 *Lettres a M. le duc de Blacas d'Aulps*』全3冊、ベルリン大学エジプト学初代教授レプシウス Carl Richard Lepsius (1811-1884)によるエジプト遠征の報告書『エジプトとエチオピアのモニュメント *Denkmäler aus Ägypten und Äthiopien*』初版(1849~59)、第1巻~第10巻である。これらはすべてエジプト学の成立に多大な影響をもたらした重要な文献である。

本稿では本を開いて展示したページの一部とその遺跡について紹介する。言及する遺跡の位置は図1に示す。なお、本稿挿図写真はすべて白黒であるが、原本の図が極彩色のものは本稿でその旨明記した。

### ナポレオン『エジプト誌』

#### 古物篇 A. Vol. 1, Pl. 18 (フルカラー) フィラエ (図2)

フィラエはアスワンの南方8kmに位置する、イシス神殿をはじめとする遺跡群が存在した島である。Pl. 18は神殿柱廊内部を繊細に模写している。アスワン・ハイダムの建設により神殿が完全に水没してしまう危機を避けるために、フィラエはブロック状に分解されて近くのアギルキア島に1970年代に移築された。ナポレオンの遠征軍が目にしたフィラエ神殿の描写は本来の姿を今日に伝える点で重要な記録である。

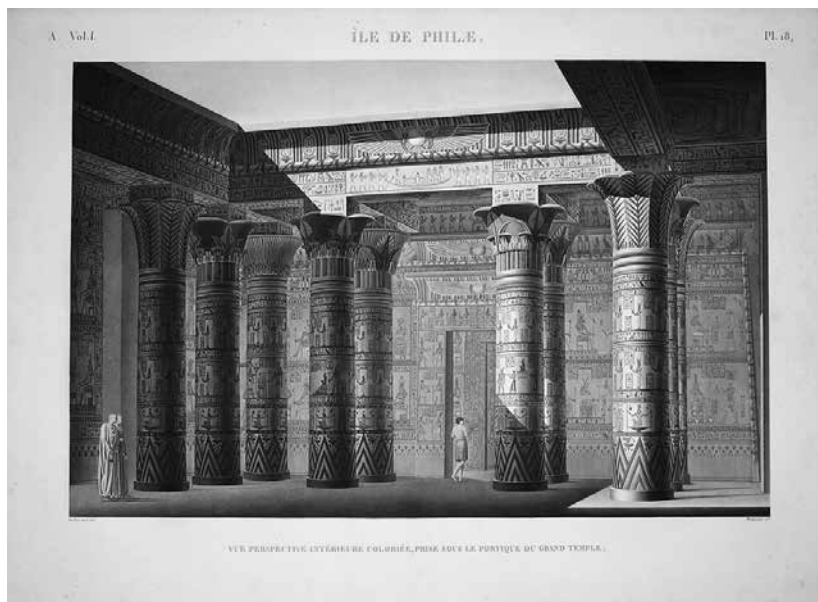


図2 フィラエ

古物篇 A. Vol. 3, Pl. 34 カルナック神殿 (図3)

カルナック神殿はテーベの東岸に1 km<sup>2</sup>以上の敷地を有するエジプト最大の神殿複合体で、中央に位置するアメン神殿域、北側のメンチュ神殿域、南側のムウト神殿域からなる。カルナック神殿は、『エジプト誌』の古代篇の中で最も多くのスペースを割いている。Pl. 34はカルナック神殿で最も有名な、両側に石の林を作っている122本の円柱を擁する多柱廊広間と、中央部の主側廊となっている12本のパピルス型円柱を描いている。この画は画家によって再構成されたファラオ存命期の神殿内部の様子が描かれている。ナポレオンの遠征軍が訪れたころの神殿は、数度の地震によって柱は倒れ、屋根が落ち、荒廃状態にあったという。

古物篇 A. Vol. 4, Pl. 12 (フルカラー)、PL. 30、デンデラ (図4、5)

デンデラはルクソールの北方70 kmのナイル川右岸に位置するハトホル女神の信仰の中心地であり、遺跡の中心はハトホル女神の神殿である。現存

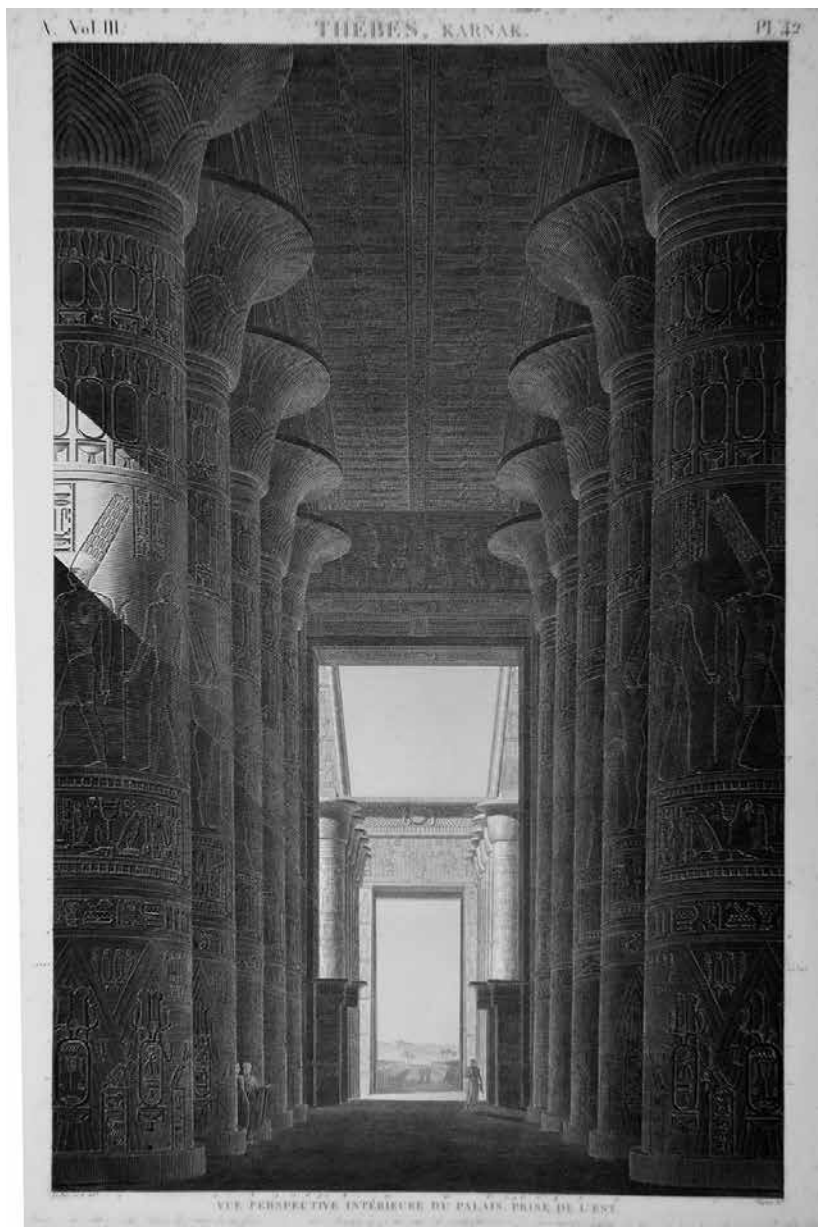


図3 カルナック神殿

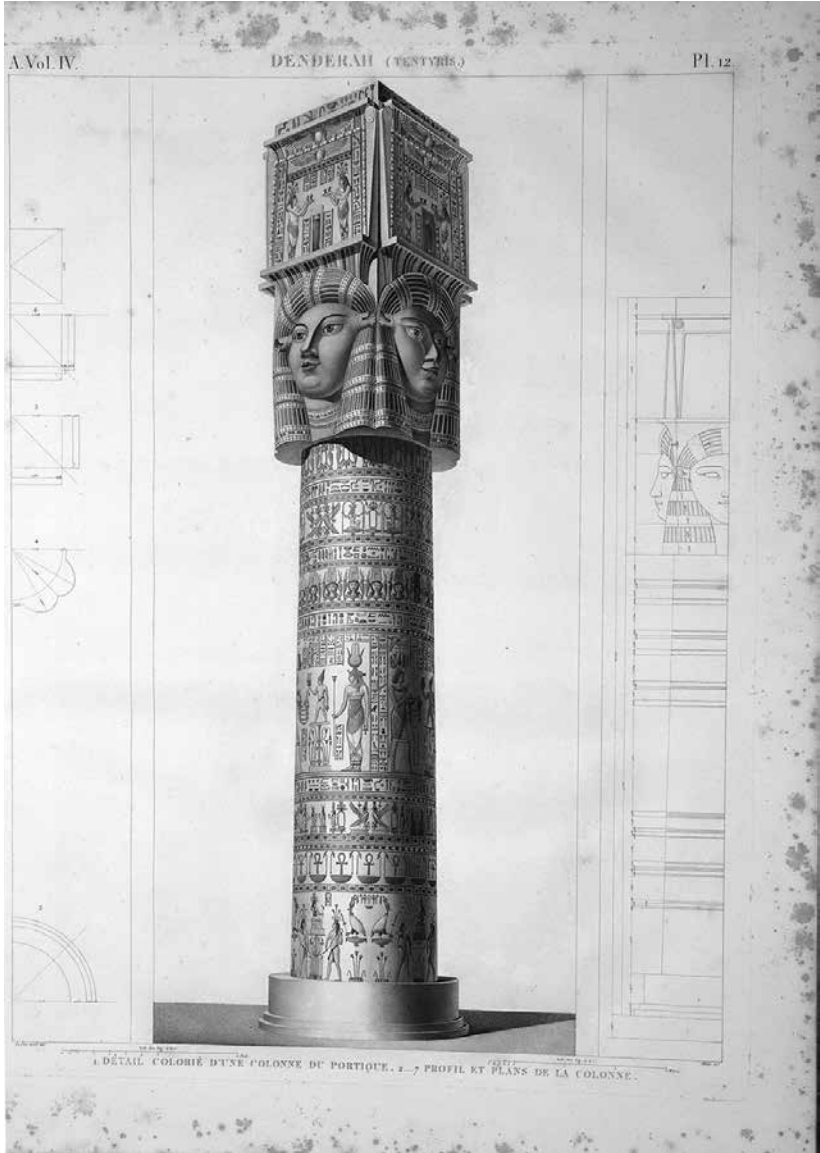


図4 デンデラ1



図5 デンデラ2

する神殿はプトレマイオス朝時代にその建築が始められてローマ時代に完成された。この神殿のほとんどの柱は、Pl. 12 (図4) のようにハトホル女神の頭を柱頭に持っている。Pl. 12 の柱はデンデラ神殿の前室のものである。ハトホル女神は正面から描かれた数少ない神様で、柱や古代エジプトの楽器であるシストルム等に表現された。Pl. 30 (図5) は神殿柱廊内部を描いたものであり、ハトホル女神の柱が並んでいることがよく分かる。ハトホル女神の柱頭部分は初期のキリスト教徒によって重度の破壊が行われたため、そのほとんどに消された跡が残っている。

#### 古物篇 A. Vol. 5, Pl. 6, Pl. 11、ギザ (図6、7)

下エジプトで最も有名なのはギザのピラミッド群である。ギザはカイロから西へ13 km に位置する台地の名である。ナポレオンの遠征当時はヒエログリフ解読以前であり、どのファラオがどのピラミッドを造ったかも確定できていなかった。Pl. 6 (図6) の鳥瞰図では古王国第4王朝のクフ・カフ



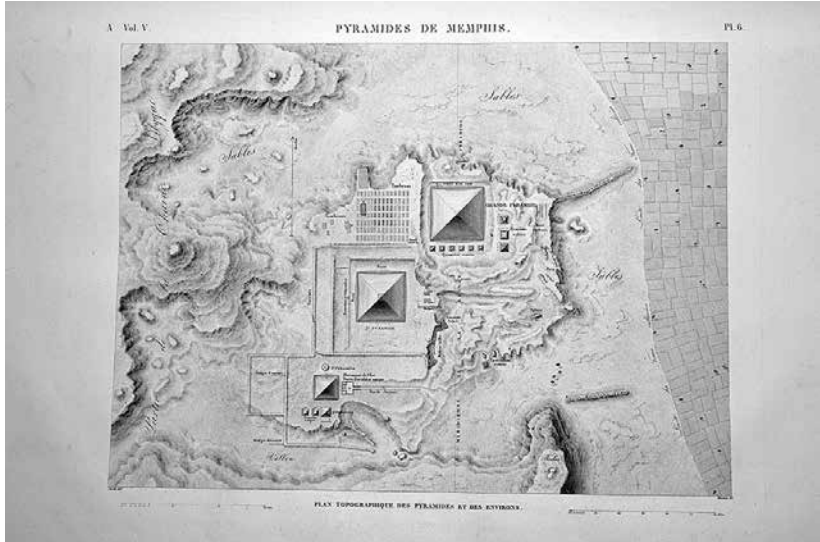


図6 ギザ1

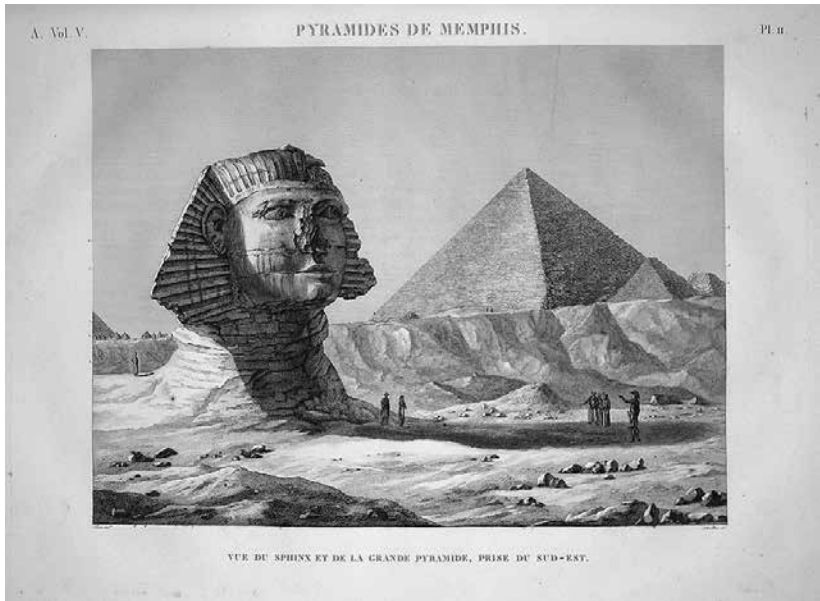


図7 ギザ2

ラー・メンカウラーのピラミッドにそれぞれ、大ピラミッド GRANDE PYRAMIDE、第二ピラミッド 2<sup>e</sup> PYRAMIDE、第三ピラミッド 3<sup>e</sup> PYRAMIDE と名称がつけられている。ピラミッドやスフィンクスのことは、既に 17, 18 世紀の旅行者によって紹介されていたが、正確な調査や測量を行ったのはナポレオン軍の学者が初めてであった。Pl. 6 のギザ墳墓地区の地図はこの地区最初の地図であると同時に、鳥瞰図という形態も当時珍しいものであった。なお、ピラミッド内部の調査成果や大きさの計測結果等、詳細な記述が見受けられる。Pl. 11 (図 7) は東からみたスフィンクスと第二ピラミッド(カフラー王のピラミッド)である。ナポレオンの遠征当時、スフィンクスは首から下はまだ砂に埋もれていた状態であったことが読み取れる。

### シャンポリオン『エジプトとヌビアの記念物』

#### I-XI, I-XIII (フルカラー) アブ・シンベル神殿 (図 8、9)

アブ・シンベル神殿は、エジプト最南端のアスワンから南へおよそ 280 km にあるヌビアの地に第 19 王朝の新王国ラメセス 2 世によって建てら



図 8 アブ・シンベル神殿 1



図9 アブ・シンベル神殿2

れた、大小2つの岩窟神殿である。I-XIとI-XIIIはどちらもイタリアのエジプト学者イッポリト・ロゼリーニ Ippolito Rosellini (1800-43) が描いたもので、I-XI (図8) のレリーフはラメセス2世の神殿の大列柱室の東壁にあり、ラメセス2世がアメン＝ラー神の面前でヌビア人やヒッタイト人を捕らえ武器で殴っている一場面である。I-XIII (図9) はカデシュの戦いでラメセス2世を描いており、一見この戦いで強靱な指導者として描写されているが、難戦を強いられたことを記述している。また、アブ・シンベル神殿はアスワン・ハイダム建設に伴い水没の危機に晒され、1968年に移築されていることから、これらは移動前の様子を描いているといえる。

### III-CCLX (フルカラー) 王家の谷 (図10)

王家の谷はテーベのナイル川西岸にある、古代エジプト最大のネクロポリス(死者の町)である。「王家の谷」という名称はシャンボリオンによって名付けられた。新王国第18王朝から第20王朝にかけて造営された王墓が

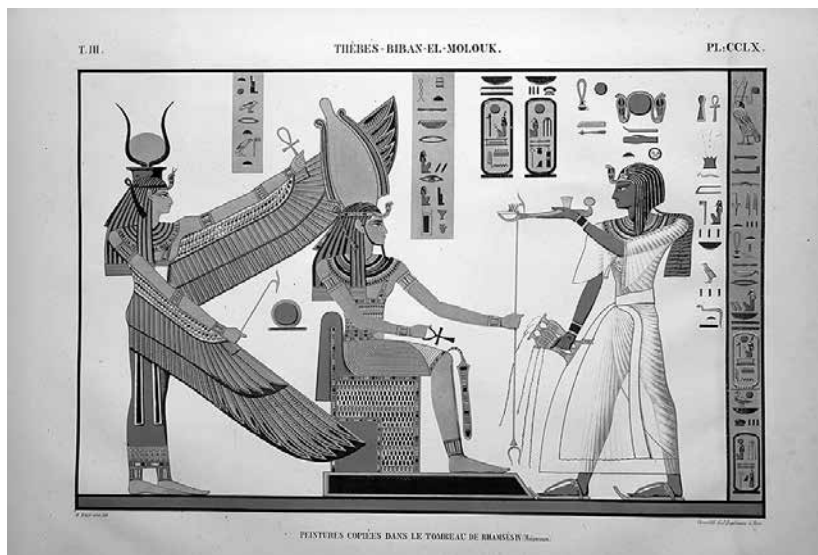


図10 王家の谷

62基発見されており、62基目は1922年にハワード・カーター Howard Carter (1873-1939)が発見した、ツタンカーメンの王墓である。III-CCLXはラメセス4世の王墓のレリーフで、ロゼリーニが描いたものだ。ラメセス4世がプタハ=ソカル=オシリス神に奉げものをしている場面である。

#### II-CLXIV (フルカラー) テーベ、クルナ (図11)

クルナはナイル川西岸のルクソールの対岸に位置し、中王国時代から王朝時代の末(前2055-332頃)までの王や高官たちの墓や葬祭殿が建設されている。II-CLXIVは新王国第18王朝のレクミラ Rekh-Mi-Reの墓にある壁画の一部を描いたもので、革や金属の加工、大工仕事をしている職人たちが作業をしている様子である。これらは副葬品の製作をしているところである。

#### IV-CCCLXI (フルカラー) ベニ・ハッサン (図12)

ベニ・ハッサンはカイロの南方275kmのナイル東岸にある墓地で、主に

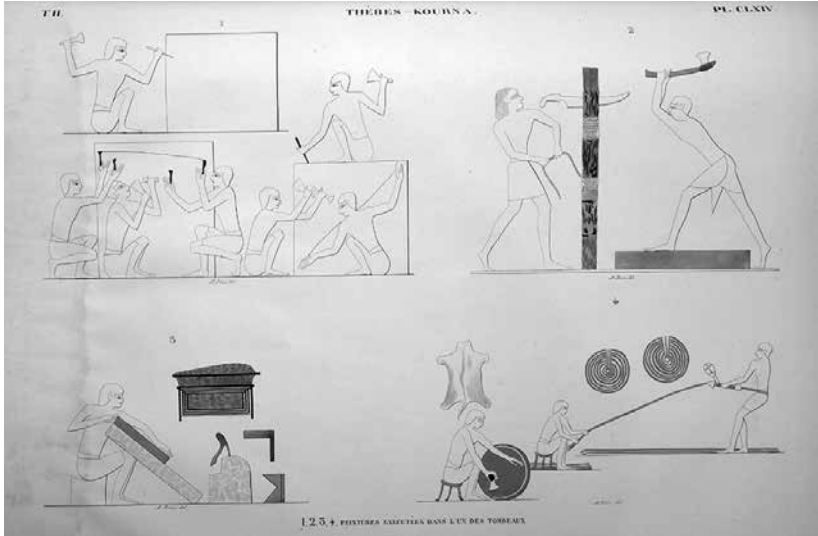


図11 テーベ クルナ

第11、12王朝時代の地方貴族の岩窟墓がある。IV-CCCLXIは中王国第12王朝のシュネンホテプ Chnemhotep の墓に描かれていて、描写されている動物はオリックスである。ベニ・ハッサンの墓の壁画の多くはこの時代を代表する、葬祭儀式や日常生活を描いたもので、アジアからの交易商人や戦闘場面、レスリングやボール遊びをする姿なども刻まれている。

レプシウス『エジプトとエチオピアのモニュメント』

I-14, I-19 (フルカラー) ギザのピラミッド (図13、14)

I-14 (図13) の鳥瞰図では、第4王朝のクフ、カフラー、メンカウラーの「三大ピラミッド」をはじめとする9基のピラミッドや付属の葬祭神殿、河岸神殿、スフィンクス、第4、5王朝の貴族の墓地群がどのように分布しているのがよくわかる。ページ上部(横向きの図の右側)が北を示し、北の最も大きなピラミッドがクフ王のもの、中央のピラミッドがカフラー王のもの、南の一番小さなものがメンカウラー王のものである。カフラー王とメンカウラー王の横に並ぶ小型のピラミッドは王妃のピラミッドである。スフィンクスはカフラー王のピラミッドの東方約500mに位置している。ナ

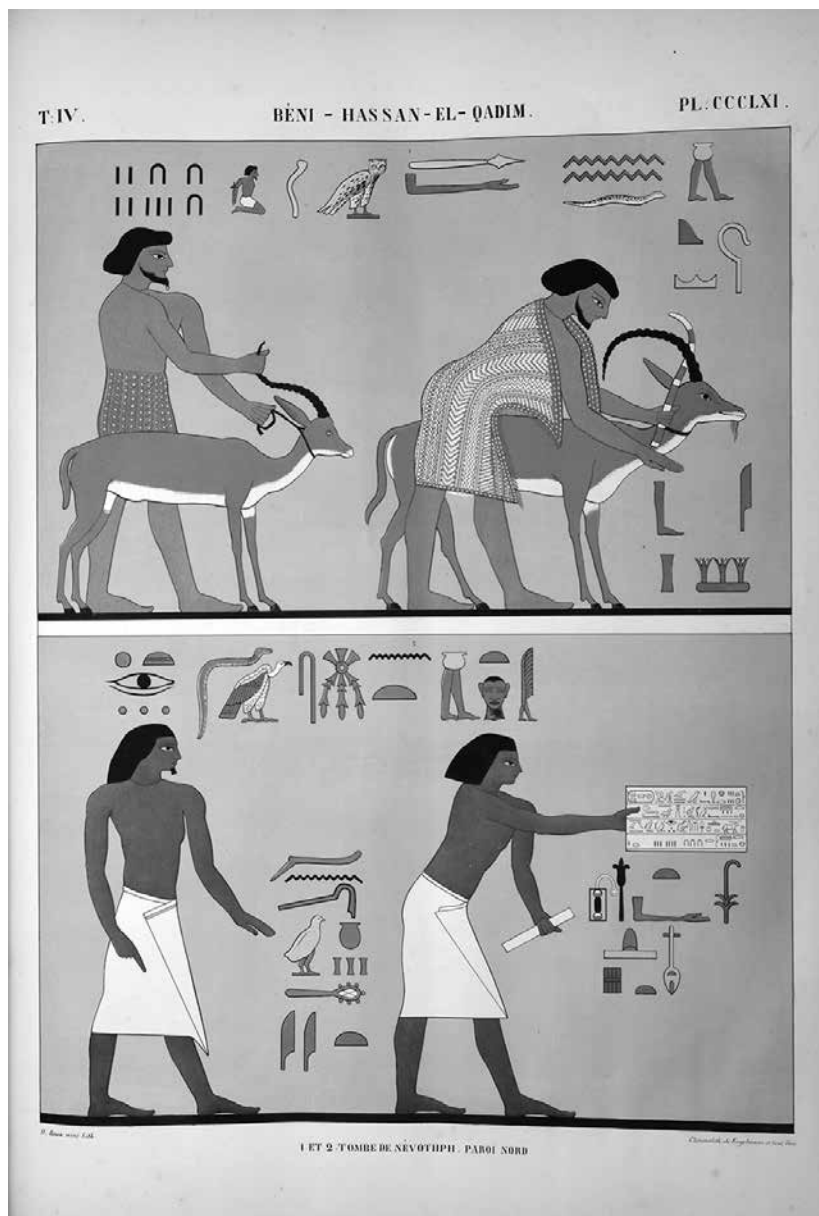


図12 ベニ・ハッサン

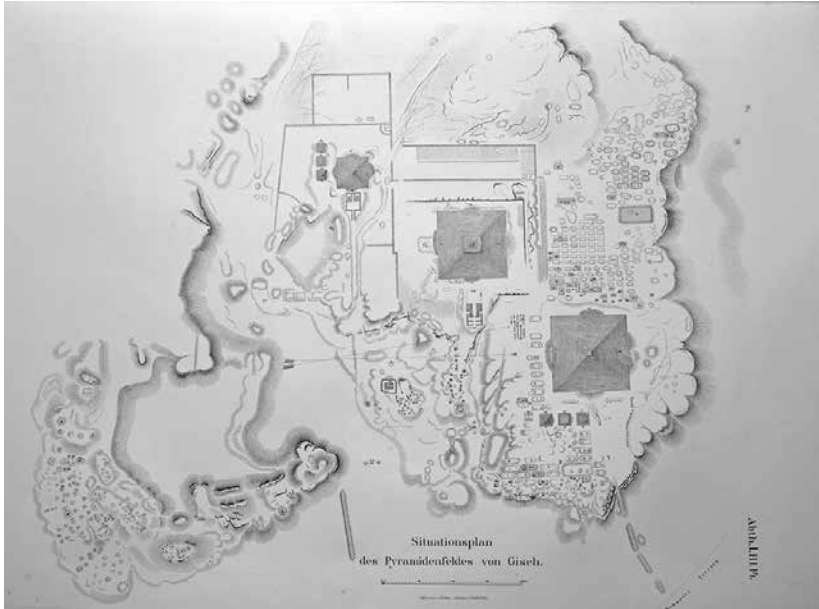


図 13 ギザのピラミッド 1



図 14 ギザのピラミッド 2

ポレオンの『エジプト誌』にも同じ地域を描いた図があるが、見比べるとより多くの遺構が明らかになったことがうかがえる。I-19（図 14）は風景画であり、南からギザのピラミッド群を描いている。

#### II-77（フルカラー）カルナック神殿（図 15）

II-77 はカルナック神殿の大列柱室を描いている。大列柱室には 122 本の円柱を擁する他柱廊広間と中央部の 12 本のパピルス型円柱が並んでいる。

#### II-91（フルカラー）メムノンの巨像（図 16）

メムノンの巨像はテーベ西岸にある新王国第 18 王朝アメンヘテプ 3 世の高さ 20 m におよぶ巨大な 2 体の座像である。アメンヘテプ 3 世が建造した葬祭殿の第一棟門の前に鎮座していたことがわかっているが、II-91 が描かれた時点でこの像を除いて残っていないことが分かる。名前の由来については、おそらく石にできた亀裂のせいで毎朝、口笛に似た音が聞こえてくるということから、古代ギリシアの旅行者たちがギリシア神話に基づき「歌うメムノン」と呼んでいたためである。3 世紀に修理された為かその音を聞くことはもうできない。

#### VII-190（フルカラー）アブ・シンベル神殿（図 17）

VII-190 はアブ・シンベル神殿内の像を描いている。右図の 4 像は神殿最奥の至聖所に座するもので、左からプタハ神、アメン神、神格化されたラメセス 2 世、ラー神である。アブ・シンベル神殿は東向きに建設されているので、日の出には太陽の光が神殿の正面を照らしていた。日の出はヒヒ（太陽の案内人を象徴している）の足元から照らし始め、崖面上部へ沿っていき、神殿正面の高さ約 20 m のラメセス 2 世の 4 体の像とその中央に位置するラー神を照らして、神殿内部へ差し込んでいくのだ。神殿の軸線は、一年のうち 2 月と 10 月の 2 回、光が内部に 60 m ほど差し込むように設計されていて、至聖所の神格化された王と 3 体の神の像を輝かせるのである。しかし、日光が入り込む時でも、プタハ神の座像の一部は暗闇に残されたままになる。



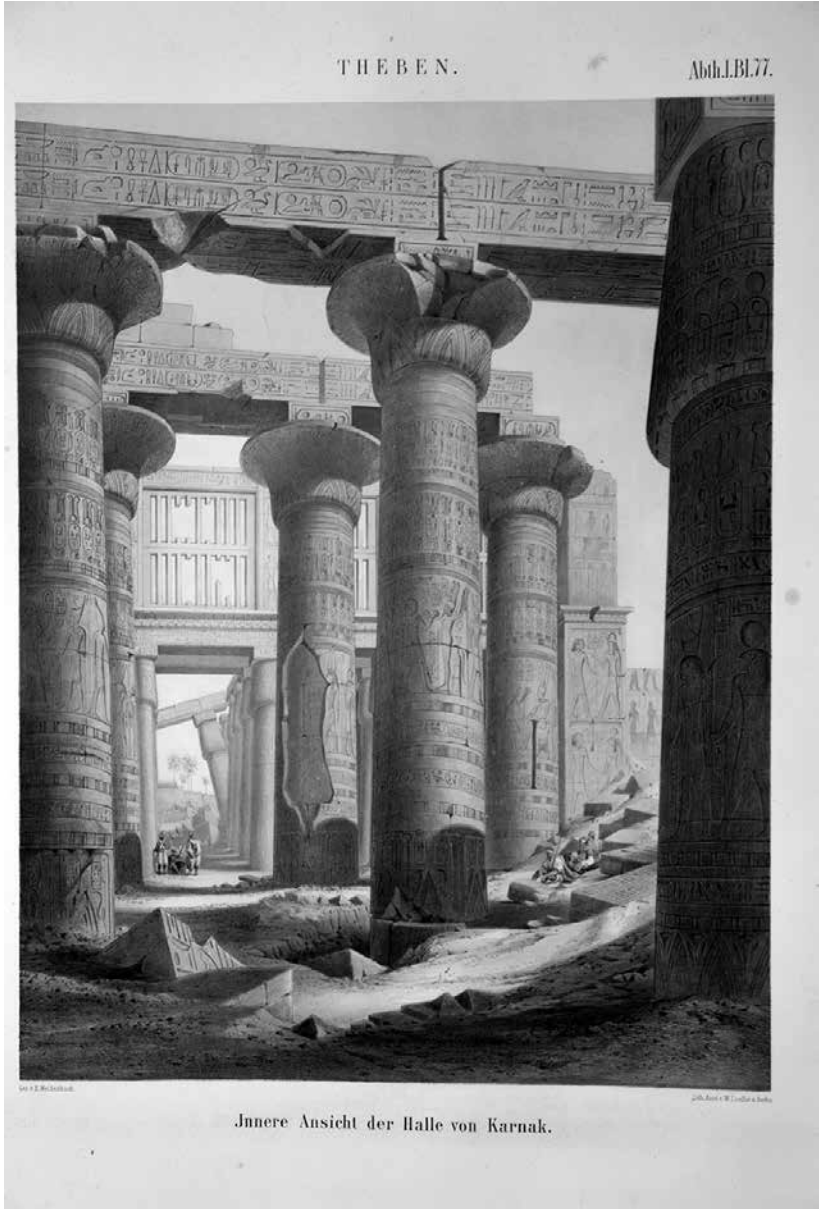


図15 カルナック神殿



図 16 メムノンの巨像

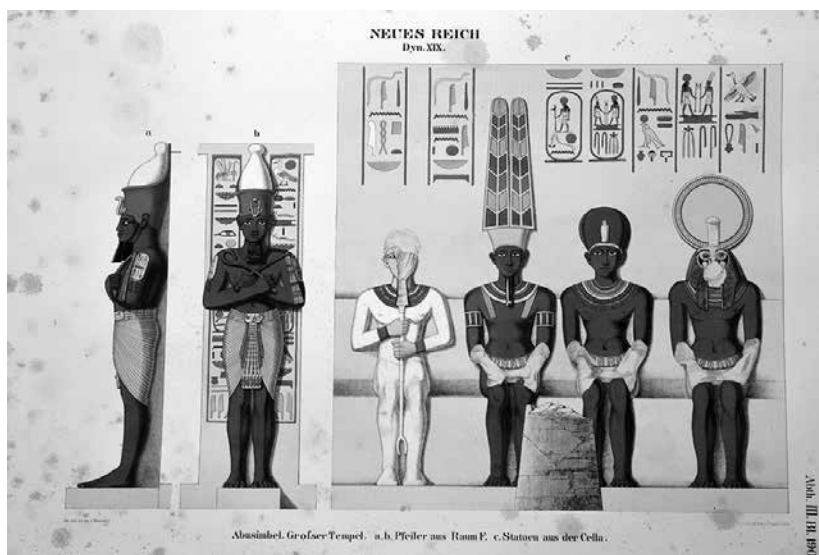


図 17 アブ・シンベル神殿

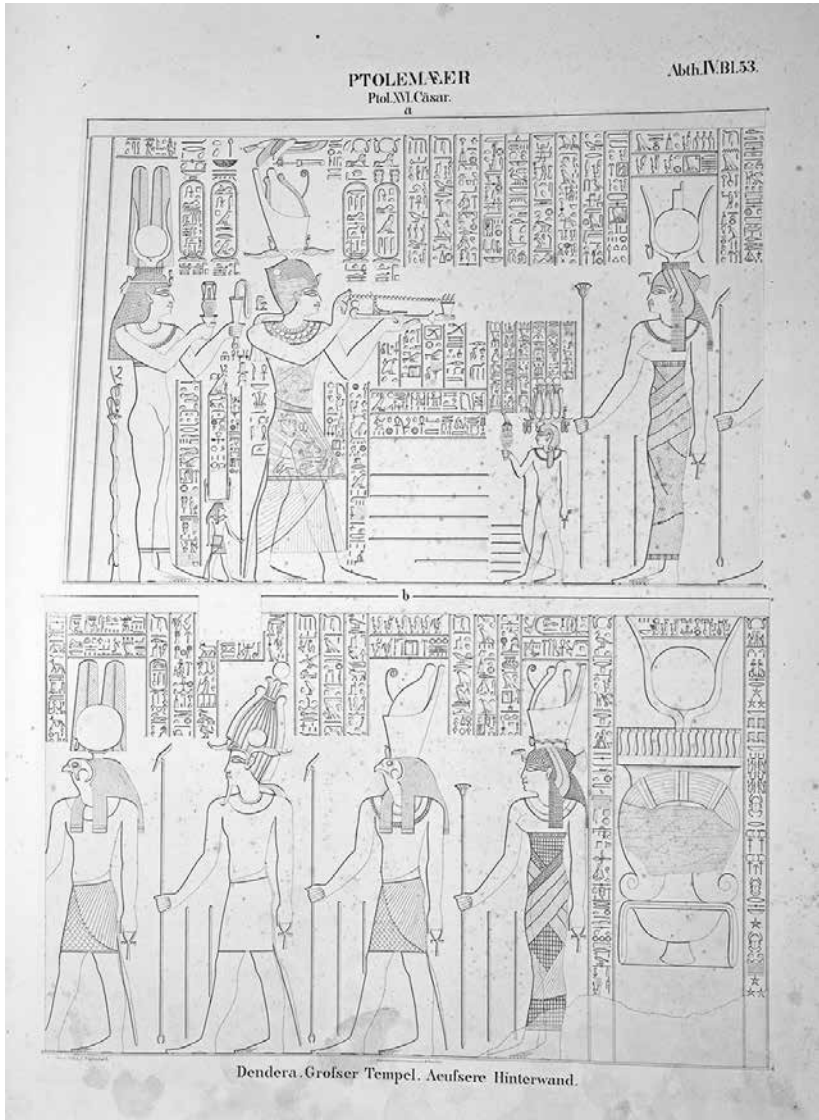


図 18 デンデラ

### IX-53 デンデラ (図 18)

IX-53 はデンデラのハトホル神殿の背面、左部分のレリーフである。クレオパトラ 7 世と彼女の息子で後に共同統治者プトレマイオス 15 世となったカエサリオンの姿が描かれている。背面の壁中央部で神殿の至聖所の真裏にあたる部分には、ハトホル女神の標章が描かれた巨大な偽の扉が存在する。このハトホル女神の標章は何世紀にもわたって、巡礼者たちにより削られてきたのだが、それはここが巡礼者たちのハトホル女神に近づくことが出来た場所であり、彼らがハトホル女神の聖なる石を得ようとしたからなのである。IX-53 においても下段に表わされているハトホル女神の顔は欠けている。ナポレオンの『エジプト誌』においても同じレリーフを題材にしている図があるが、そこではハトホル女神の顔は復元されている。

### おわりに

以上、本年展示を行ったエジプト学貴重書の紹介を行った。19 世紀フランスとドイツが国家の威信をかけて製作した豪華本は多くの人々に感銘を与えた作品であるだけでなく、現在では劣化・崩壊してしまった遺跡、アスワン・ハイダム建設で移築されたアブ・シンベル神殿やフィラエの神殿を本来あった姿で眺めることができる重要な資料である。多くの来館者に恵まれたことを感謝し、結びの言葉にかえたい。

### 参考文献

- Arnold, D., 1994, *The Encyclopedia of Ancient Egyptian Architecture*, Artemis and Winkler Verlag
- Davies, N.G., 1973, *The Tomb of Rekh-mi-rē at Thebes*, New York, MCMXLIII
- Lehner, M., 1997, *The Complete Pyramids*, Thames and Hudson Ltd, London
- Newberry, P.E., 1893, *Beni Hasan*, Part 1. The Egypt Exploration Fund
- Reeves, N., Wilkinson, R.H., 1996, *The Complete Valley of the Kings: Tombs and Treasures of Egypt's Great Pharaohs*. Thames and Hudson, London.
- Wilkinson, R.H., 2000, *The Complete Temples of Ancient Egypt*, Thames and Hudson, London.
- イアン・ショー ポール・ニコルソン (内田杉彦訳) 1997 『大英博物館古代エジ

プト百科事典』原書房

ブライア、ボブおよびピーター＝ドーマン（共同解説）1988『古代エジプトの栄光  
——ナポレオン「エジプト誌」図録聚英』雄松堂出版